

0 社会運動のグローバルな拡散に関する思想史的研究

世話人：田中ひかる（明治大学）

報告者とテーマ：

関口寛（四国大学）「全国水平社創立の思想—社会運動のグローバルな拡散に着目して」

山本明代（名古屋市立大学）「1956年のハンガリー革命後の難民学生による社会運動」

討論者：梅森直之（早稲田大学）

このパネルでは、国境を越えて結びつくグローバルな社会運動における思想の「拡散 diffusion」のプロセスとその研究の意義を検討することをめざした。

このような問題設定は、世話人・報告者・討論者を含むメンバーによる共同研究から生まれている。この共同研究は、2011年に起きた「アラブの春」がスペインのインディグナードスの運動、さらにオキュパイ・ウォール・ストリートの運動に影響を与える、といった最近の現象から多くの示唆を得ている。

その上で、そのような現代の新しい現象の系譜を100年以上前の過去にさかのぼって明らかにすることを目標に定め、社会運動・思想史研究を、国民国家の歴史から解き放ち、トランスナショナルあるいはグローバルな枠組みで捉え直すことを目指し、その成果の一端を明らかにしている（『社会運動のグローバル・ヒストリー』ミネルヴァ書房、2018年）。

以上の研究を基礎にしながらこのパネルでは、社会運動が国境を越えて結びつく際、運動とともに思想が国境を越えて「拡散」している、という現象、とりわけそのプロセスとその研究の意義を検討することを目指した。

この場合の「思想」とは、非言語的な実践を含む多様な表現行為を含み、また「拡散」とは、思想が発信された・受容された「結果」だけではなく、邂逅・交渉・共感・増幅・屈折（ボタンの掛け違い・勘違い・変容）・無関心・無視・敵対・衝突といった、「拡散」のプロセスにおける矛盾や対立も含む現象として設定している。

この「拡散」のプロセスを解明する意義は、第1に、「孤立している」とみなされる個人やグループ、あるいは、ナショナル／ローカルな「伝統」に根ざしている、と思われがちな運動や思想が、実際には国境を越えた「拡散」の影響を受けている、という視点を提示することであり、第2に、様々な社会運動・思想が地球上の異なる地域でほぼ同時に起きる、という現象を、グローバルな「拡散」の結果として捉えることを通じて、彼らが対峙するグローバルな統治構造（政治・経済・文化・イデオロギーなど）との関係性の中でとらえる、という視点を提示することにある。

世話人の田中ひかるによる以上の趣旨説明に続いて、関口報告と山本報告がおこなわれた。

第1報告の「全国水平社創立の思想—社会運動のグローバルな拡散に着目して」で報告者の関口寛は、主に、1922年に創立された全国水平社の「全国水平社創立社宣言」を構成する文言を分析した。

同宣言における、人間は「いたわる」ものではなく「尊敬する」べきもの、とする表現は、相馬御風『ゴーリキイ』（1915年）から取られたことがこれまでに明らかにされている。関口はこれに加えて、相馬の著書をつうじて紹介されたゴーリキー『どん底』（1902年）における「浮浪者、前科者、犯罪者、障害者、娼婦でも尊敬しなければならない」という主張が、当時の被差別民にむけられた優生学などにもとづく統治の眼差しに対抗する

論理として受容されたことを指摘する。

じつは当初、ゴリキーは同箇所を、底辺社会から脱出するあてのない空虚な言葉として描いたのであった。こうした著者の意図を超えてその後の作品評価を方向付けることになったのが、クロポトキン『ロシア文学の理想と現実』（1905年）である。「人間は尊敬すべきものだ」という訴えは、クロポトキンが主張した相互扶助論的な社会進化論と共鳴する内容であった。

かかるゴリキー評価を日本に伝えたのが相馬御風であった。1910年頃の日本では、『どん底』は文明社会を野蛮に退行させる「浮浪主義」である、と否定されていたが、御風はそれを転換した。こうして、浮浪者、前科者、犯罪者、障害者、娼婦の人びとであっても、尊敬を受けることを要求する論理がもたらされた。西光万吉「人間は尊敬す可きものだ」（1922年）はその事情を裏付けるものといえる。

以上のように、ロシア起源の文学に表現された言説とその解釈が、国境を越えて拡散することで、水平社創立者たちによって発見され、運動の基盤となる思想として獲得されるという過程が明らかにされた。

加えて関口によれば、「人間は尊敬されるべきもの」という原理は、水平社の演説会でも度々主張された。そういった演説会では、警察と聴衆の衝突、検束された同志たちの解放という出来事を通じて、水平社の組織拡大が成功していったが、それは、聴衆が弁士らによる言説によって力を与えられたからだと考えられる。言い換えれば、全国水平社の活動は、国境を越える拡散を通じて獲得した思想を用いて、被差別部落民と世界との関わりを分節化するフレームを形成することに成功したということになるだろう。以上が関口報告の結論である。

第二報告の「1956年のハンガリー革命後の難民学生による社会運動」では、報告者の山本明代は、1956年に起きたハンガリー革命の後、アメリカ合衆国に難民として受け入れられた学生たちが、亡命後のアメリカで形成した思想を、日本とインドネシアに拡散する経緯を明らかにした。

56年のスターリン批判以後に起きたハンガリー革命において学生たちは抵抗運動組織を結成し、集会を組織し要求項目を提起する。しかしソ連軍による革命に対する弾圧を受け、約20万人の難民が発生し、そのうち約3千人の学生が難民としてアメリカに受け入れられる。

難民学生たちは、翌57年には北米ハンガリー協会、そして、世界に離散したハンガリー難民学生を結びつける自由ハンガリー学生連合を結成する。また、CIAから資金提供を受けたアメリカ学生連盟の支援を受け、アメリカの大学で講演活動などを通じてハンガリー革命やハンガリーの現状を伝える活動を展開する。

そのような活動の中で、難民学生たちは、アフリカの植民地解放運動、アメリカ国内の人種差別に向き合い、これらと連帯するようになり、それまでのソ連批判が、反帝国主義・反植民地主義という新たなフレームで把握されるようになり、世界的な視野を獲得するに至った。

さらに難民学生たちは、1957年5月から8月までインドネシアや日本をはじめ東アジア数カ国を歴訪して各国の学生団体と交流する。このうちインドネシアでハンガリー難民学生たちは、革命の意図や、革命が勝利していた場合、どのような政治体制を目指したのか、というインドネシア学生からの質問に対して、「民主主義的な社会主義を志向していただろ

う」と回答した。「民主主義的な社会主義」とは、第二次世界大戦後、ハンガリーがソ連の影響下にはいるまでの数年間に農民や労働者を基盤とする人々によって提唱されたソ連型でも欧米型でもない「第三の民主主義」のことを意味している。この思想をハンガリー難民学生たちが初めて学んだのは、共産党一党支配に伴いハンガリーからアメリカに亡命した民族農民党员らとの交流を通してであった。

ハンガリー難民学生たちは、インドネシアの全学連と共同声明を発表し、その中では、民主主義と民族独立のための闘争することを通じて諸国民の自由と平等を強化することがうたわれていた。つまり、アメリカ学生連盟やアメリカ政府の意図に反して、インドネシアの学生たちに対して、人民社会主義や民族独立という運動の目的を発信し、彼らの思想を拡散したのである。これに対して日本では、全学連が会談を何度も拒絶したため、同様の思想を拡散させるに至らなかったが、ハンガリー難民学生たちが、ハンガリーからアメリカへという移動の経験を背景にしながら思想を形成し、これをアジアの学生たちの間に拡散しようと試みた活動は、今日から見てきわめて先駆的なものだったと評価できる。

以上の2つの報告に対して、討論者の梅森直之から、関口報告については、同時代、文字が読み書きできない被差別部落民が、移動することを通じて思想を拡散していった、という事例があるか、という問題、山本報告に対しては、ハンガリー学生たちが伝えた思想がその後どのようなかたちで展開していったのか、という問題が提起された。

これに対して関口は、アメリカに移住した被差別部落民が水平運動をアメリカ社会に紹介し、マークス・ガーベイらのアフリカ系アメリカ人の解放運動との連帯を企図した事例や、白人から人種差別を被っていた在米日本人が水平運動と連帯し新聞を発行した事例が示され、山本からは、学生出身者が1989年にハンガリーに帰国して政治家となったという事例が示され、また、インドネシアや日本でその後展開された学生運動には、ハンガリー難民が当時拡散しようとした思想との類似性が見られたという指摘があった。

フロアからは、1. 被差別部落民の労働運動における思想の影響やアナーキズムからの影響について、2. 赤狩りがおこなわれていたアメリカで共産主義圏から難民を受け入れることができた理由について、3. 学生たちが獲得した人民民主主義の起源について、4. ハンガリー学生運動の日本の学生運動への影響について質問があった。これに対して、1. 水平社の運動は初期からアナーキズムの影響が強く、労働運動においても運動があった、2. アメリカのアイゼンハワー政権の政策が受け入れを可能とした、3. 人民民主主義は農村部で醸成された思想であり、学生たちはアメリカで本格的に学んだこと、4. 日本への影響は、1970年代から形成される東欧史研究においてスターリン批判を踏まえた研究が開始された点に見られる、という回答があった。参加者は15名程度であったが、重要な質問があり、それに対する報告者の回答がさらに新たな事実を提示することを通じて、今後研究をさらに発展させる上で意義のあるセッションとなった。